



Kobe Shoin Women's University Repository

KARASHI-DANE

あとがき

著者	黒澤 一晃
著者別名	Kurozawa Kazuaki
雑誌名	松蔭女子学院史料
巻	10
ページ	236-238
発行年	2017-11-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1044/00002013/

あ と が き

英語の教師としてのミス・リーの素晴らしさを、2～3、ご披露させていた
だきたい。

それは、私が聖ミカエル国際学校の夜間英語コースに通い始めて半年ばかり
経過したころのことであった。先生が、初めて厳しい口調で、「そんなことで
は、英語は上達しませんよ」とおっしゃるのです。「どうしてですか？ この
厳しい寒さのなか、雨の日も風の日も、ただの一日も休まずに一所懸命勉強し
ているつもりですが、どうして駄目なのでしょうか？」と、必死になって訴え
た。と云えば聞こえはいいが、それは知る限りの英単語を並べただけの必死の
抵抗であった。

ところが、先生は、「如何に真面目に教室に出席されようと、このままでは
駄目です」と、平然と冷たく言われるのです。「どこが悪いのですか。突然そ
のようなことをおっしゃられては困ります。どこが悪いのか、おっしゃって下
さい」との私の抗議に、「では申し上げます。それは、あなたの言葉に感
情が籠っていないことです」と云われるのです。

それに対して、私がどう答えたか。今でも、汗顔ものだが、その時の私の答
えは、「それは、そうでしょう。感情などを入れようとしていませんでしたか
ら」というものであった。家に帰ってから母親に、「先生に、そんな失礼なこ
とを言うてはいけません」と、こっぴどく叱られた。たしかその日は、6時ま
で電気の来ない日で、黒板の字が読めなくても出来る授業ということで、「受け
答えの練習」をしていた。感情の籠っていないことが、見え見えだったと思う。

イギリス人であるリー先生は、be 動詞だけでなく、have 動詞も一般動詞か
ら区別しておられた。相手の使った動詞に応じて、助動詞を選び、tense も合
わせて打って返す練習だったが、内容はごく簡単なものであった。ただ、例え
ば“Oh, really?”とか“Is that so?”とかでは駄目で、相手が使った動詞に合った助

動詞を、それにあった tense を用いて、相手と向きあわねばならなかった。しかし、そんなことはいとも簡単なことだった。やろうとしなかったから、おもてに出ていなかっただけのことである。

今思えば、これこそが当時の中学生の ― と云うより大多数の日本人の ― 外国語学習姿勢の最大の欠点であったと思う。そして、こんなに簡単な英語ではなく、もっと難しいものを教えていただきたいという、ある意味では厚かましく、ある意味では思い上がりがモロに出ていたと思う。

その時、「言語は“means of communication” だから」と、おっしゃられたのを覚えている。― この言葉は、それから10年も20年も後になって流行りだした言葉である。― 「どこでも使えるような表現では、こちらが分かったか分かっていないかということを相手に正確に伝えられないではないですか」と、云われるのです。もちろん、その3～4分後に云われた“I have bought a nice new car.” というのに対して、精いっぱい皮肉を込めて、“Oh, have you?”(まさか、ウソでしょう!)と打って返したら、日本語で、「ちゃんと、よくお分りになっているじゃありませんか」というコメントが返って来た。― 先生は、こんな時に限って、日本語を使われたのです― さすがに「できなかったのではありません。必要と思わなかったから、云わなかったのです」とは云わなかった。先生のおっしゃる趣旨がよくわかったからである。この出来事は、今でもしっかりと私の脳裡に焼き付いている。

もう一つ、私にとっては、目からウロコが落ちるというか、大いに考えさせられたことがある。ある日のことである。たしか、学校文法でやかましく言われていた、shall と will の使い方について質問していた時のことである。「どうして、そんな難しいことばかりを問題にされるのですか? それは、それこそ^{かみしも} 袴をつけたような表現で、私たちも、よほどの時でないとなような表現は使いません」とおっしゃるのです。「でも先生、私たちは、高等学校〔旧制〕の受験に備えて、このあたりのこともしっかりと勉強しておかなければいけないのです」と云う私に対して、先生は「それなら、私もそのような難しい試験に

は合格できないでしょう」と、云われたのです。これには、流石の私もこたえた。そして、真剣に考えた。

これには、後日談がある。私は、幸運にも高校受験に合格した。4月から始まる新しい大人の学校生活に備えて、ミス・リーのクラスを退学したいという趣旨のお礼状を書いたところ、直ぐに「おめでとう」というお手紙を頂いた。その手紙の宛先には、Master Kazuaki Kurozawa とあった。その後、30～40年も経って、そして先生も亡くなられた後になって、この Master には、幼い少年に対する「坊や」といった意味のあることを知り、地団太を踏んだが、後の祭りであった。いずれにしても、たとえ僅かの期間にせよ、リー先生に英語を教わったことは、私にとって実に大きな遺産となっている。

最後に、この翻訳に際する苦労話を一つ。京都の三十三間堂に関して「ほぼ等身大の仏像の彫刻が、縦に6列にぎっしりと並んでいるのです。……その数は999,999あると云われています。」とあるが(169ページ)、今回はこれに嵌められた。まさかと思いながら、いくら何でも999,999体というのは、余りにも多すぎると思って、いろいろの方々に教えを乞うた。すると、いわゆる早口言葉のなかに、三万三千三百三十三体^{くだり}という件のあることが分かった。確かに、but few stop to verify the number〔直訳すると、その数を確かめようとする人など滅多にいないとなる〕という伏線もあり、「It is said that there are…とは云っていますが、私が云っているわけではありません」と云われれば、それまでである。あまり拘ると、「受動態には、主体をぼやかす働きのあることをお忘れになっているのではないのでしょうか？」と云われると、私の完敗になる。

いま、天国で「naughty boy(やんちゃ坊や)の黒澤さん、小さい時とあまりお変わりになっていませんねえ」と、私を見つめて下さっているのを感じながら、このあとがきを終えたい。

巻頭のリー先生のお写身は、松蔭短期大学卒業生・田村圭子氏から提供していただいた。心より御礼申し上げます。

2017年11月1日

黒澤 一 晃